

宝冠装飾空間の文様分析（1）

法隆寺金堂釈迦三尊像脇侍・四天王像・夢殿救世観音像宝冠の造形比較

山 本 謙 治

はじめに

従来の文様史研究では、単位モチーフによる分類と系統づけ、さらにその単位モチーフがいかに組み合わせられるかという文様構成法が主要課題となされてきた。しかしこうした研究視点では、地域や時代を通して個別モチーフ文様の連続性を跡づけることはできても、人間が特定の空間をいかに形づくり、どのように装飾していくのかという造形力や造形原理については理解することができない。当然ながら表現されるものは表現の場によってその形が限界づけられる。文様という装飾も、それがいかなる形の空間に施されねばならないかによって、自ずとその形や構成が変えられる。文様は具体的な作品や具体的な装飾の場から切り離して考えることはできない。モチーフだけを切り離して問題化するとき、すでに造形としての文様の意味は失われている。さらに装飾される空間から切り離して個々の文様を分析しても、それは単にパターンの集成としかならない。文様史は個別文様のパターンの歴史ではなく、空間装飾の歴史（装飾史）として意味づけられねばならない¹⁾。

このように文様史を装飾史の一環として考えようとする場合、造形的な文様分析の視点としては次の3点が必要となる。

- 1) 文様が施される装飾空間の分割構成法
- 2) 単位文様および文様ユニットの構成法
- 3) 装飾空間への文様の布置構成法

ここにいう装飾空間とは文様により装飾される空間、また単位文様はひとつにまとまった文様

の最小単位、文様ユニットは単位文様が複数組み合わせられてできる文様単位を意味する。1は文様が施される場となる空間が、作品全体の中でどのように分割区分され構成されているのか。2は個々の文様自体の構成法。3は個々の単位文様が、分割構成された装飾空間のなかにいかに配置構成されていくのかという問題化である。

従来の文様史研究では、個々の文様自体の構成とそれらがどのように組み合わせられるかという配置構成が課題とされてきた。花唐草を例にとれば、栓形・対葉形・扇形などの文様要素によりひとつの花形単位文様が構成され、この単位文様が並置法・対置法あるいは蔓莖などを用いた連続法によって配置構成されるといった分析である²⁾。しかしこうした両者の構成、なかなか単位文様の配置構成は、まずそれらが配置される場の形により制約され、限界づけられる。モチーフは装飾空間とは無関係に考案され伝播することがあっても、モチーフの文様化は装飾空間に対応したものとして造形化されると考えるべきであろう。したがって上記2・3の構成法は、1を前提として分析されねばならない。

従来こうした分析がおこなわれなかったのは、これまでの文様資料が、単位文様のみ、あるいは数個の単位文様の組み合わせ部分のみを切り取って提示されてきたのが原因でもある。個々の単位文様と同時にそれらが配置される装飾空間全体の資料が提示されることは極めて少ない。仮に装飾空間全体が提示されたとしても、こんどは細部が小さく不明瞭で、個々の単位文

様やその組み合わせ状況が判別できないということが多かった。文様資料は全体と細部の両方を示すことが不可欠であり、文様史研究ではこうした資料の作成方法自体から考え直す必要がある。

本稿では以上のような問題意識に基づいて、法隆寺金堂釈迦三尊像脇侍・金堂四天王像・夢殿救世観音像の3つの宝冠を対象とした装飾空

間の造形分析を試みる³⁾。個々文様のモチーフや構成法、単位文様の布置構成法は別稿をなすこととし、文様が配置される空間がいかにか構成され形作られているのか、そこにどのような造形要因や造形原理を見いだすことができるのかを考えてみる。3つの宝冠では四天王像および救世観音像の宝冠が透彫り、脇侍宝冠は鑄造という技法上の相違がある。こうした技法の相違は、文様自体の構成法を一律的に比較する場合には妨げになるが、宝冠自体の空間構成ということでは同質的な比較も許容されるであろう。

3 宝冠の空間分割構成比較

図1は3宝冠の展開図を拓本および復元図より修正作成したものである⁴⁾。この種の資料は従来の研究においても提示されてきたが、こうした図からでは宝冠内の空間がどのように分割構成されているかは理解しにくい。そこで本稿ではこれら展開図に基づいた空間分割構成図を作成し、それによって各宝冠の空間構成を比較検討していくことにする。

1. 釈迦三尊像脇侍宝冠(図2)

この宝冠は頭飾部分の外形からすれば山形頭飾の三山冠に分類されるが、正面頂部の日月形およびその左右の半パルメットの上部が頭飾基幹部分より突出している点が他の三山冠作例とは異なる⁵⁾。頭飾内部の空間は、左右対称部分を同一種類と数えて ~ の8種に分割されている。これらの分割空間のうちもっとも特色がある形は正面中央 ~ の構成部分である。この部分は半パルメット形と日月形を除いて、 ~ の部分が、三角形の前立、あるいは三角型文と解説されている⁶⁾。これは ~ の部分を合わせた全体の形がほぼ三角形に近いということからの見解であろう。しかしここで ~ をひとつの形として把握するか、の円形部分と ~ の部分を別物として考えるかは、このような空間分割の成立したプロセスを



釈迦三尊像脇侍宝冠展開図



四天王像宝冠展開図



救世観音像宝冠展開図

図1 3宝冠展開図

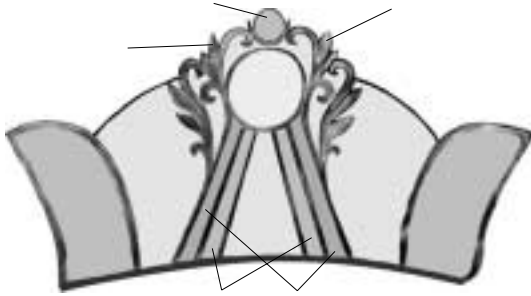


図2 釈迦三尊像脇侍宝冠空間分割構成図

考察するのに重要な問題が潜んでおり、単純に全体の輪郭から安易に名称をつけてはならない。文様史ではいったん形式名称がつけられると、それがひとつの文様形を示す固定観念となり、別視点からの形式分解が難しくなる。

この宝冠では ~ はひとつの三角型文と考えるべきではない。この分割空間の基本となるのは、の円形部分との三角部分である。両者は本来別々のものであり、の上になが置かれた形で組み合わせられ、その不安定感をおぎなうために、の左右にとが付加されたのである。したがって仮に三角型文という名称を使用するならば、の部分だけをさして使うべきであろう。このような解釈の証明には、四天王像と救世観音像の両宝冠、小金銅仏宝冠作例、雲岡石窟宝冠作例の検討が必要となるので、その詳細は後に記すこととし、ここでは ~ をひとつの空間として認識することの誤りを指摘するにとどめる。

さて、三山冠という頭飾形式が踏襲されている場合、脇侍宝冠の空間構成方法を考えることは容易であろう。透彫り技法になる四天王像や救世の宝冠では平面上での細かな下図の作成が必要となるが、鑄造である脇侍宝冠の場合は、全体の輪郭と主要な構成部分の認識があれば、実際には塑形の段階で経験的に構成バランスが決められていったであろう。

三山冠の輪郭と正面に円形蓮華文を配する前提があれば、それを支える基底部分 ~ の造形割合は自ずと決定される。図3に示すよう

に基底部分 ~ の底辺の長さ(a)は宝冠が正面から側面へとカーブを始めるまでの間隔、ほぼ額の長さを基準としている。これは脇侍宝冠のみではなく、四天王や救世の宝冠においても同様である。鍵穴形が宝冠正面を飾るものであれば、その基底部分底辺の長さが額の幅にほぼ等しく決定されることは自然なことだといえよう。この(a)の長さを底辺中央Aより立ち上げると円形蓮華文の中心点Bが定まり、これを支える形で ~ の構成を決定し、左右に脇立ち部分を配置する。これによって自ずと全体の形は定まる。あとは円形部分の上に付加する日月形と基底部分 ~ の左右に付加する半パルメットのバランス、構成割合が問題となる程度である。こうした推測が可能となるのは、この宝冠の分割空間がいずれも明確な帯状線によって輪郭づけられているからでもある。四天王像や救世観音像宝冠の場合、図1の展開図を見ても空間分割のありようはわかりにくい、脇侍宝冠は一見して分割区分の状態が把握できる。これは ~ およびの空間を区分する帯状線が施されているからである。

以上のことはこの宝冠における空間構成の特質をよく示している。すなわち各空間部分が、非常に厳格な輪郭(明確な区分帯)をもって独立しており、その各部分が足し合わされることにより全体が構成されるのである。またこの厳格な輪郭区分と加算的構成法に対応して、各部分に施された個々の文様も、たいへんはっきりとした輪郭を持つ大ぶりのもので、各分割空間内に独立して布置されており、他の分割空間内にある文様とは相互に関連性をもっていない。

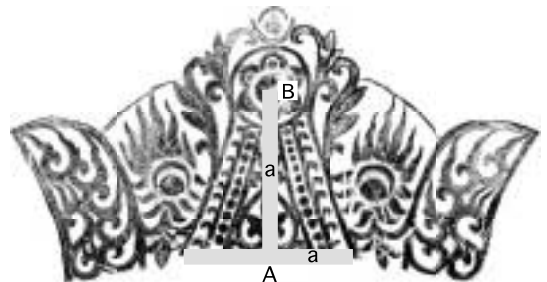


図3 脇侍宝冠空間構成法

2. 四天王宝冠(図4)

四天王宝冠内部の空間は、左右対称部分を同一種類と数えて ~ の7種に分割されている。このなかでまず目を引かれるのが、外周部分を飾る大小六枚の翼形である。これらの翼形は先端を巻き込む同一形式のもので、下方より上方にむかって順次小さくなってゆき、中央上部の最小翼の間に変形した日月形が配置されている。

翼形の面積比率は全体面積の35%を占めているが、実際に感じる大きさの印象は翼に囲まれた基幹部分 ~ に比較して感じられるものであろうから、この部分に対する面積比をとると実に57%に及ぶ⁷⁾。宝冠の基幹部分として視覚認識される面積の半分以上の大きさをもって作られているのであるから、これらの翼が巨大な印象を与えても不思議はない。翼が取り付けられる部分の透彫りは救世宝冠に比べればはるかに太いのであるが、それにもかかわらず現状の四天王像四体の宝冠はいずれも翼を支える部分の破損が著しい。これは翼の重量を支えるには、最初から構造上の無理があったと考えるべきで、そうした無理を冒しても、なお翼形の造形比率をここまで大きく取らねばならなかったわけである。おそらく制作者には、四天王像の宝冠には巨大な翼を造形化することが不可欠であるという意識があったのであろう⁸⁾。

これら翼形に囲まれた部分には明確な輪郭を指摘できないが、その中央には外周を連珠文帯によって区分された ~ の構成部分がある。脇侍宝冠の正面では、円形部分が三角形と帯状空間・によって支えられるような形で一つの構成化が行なわれていたが、と ~ の二つの部分は完全に融合したものではなかった。これに対し四天王像の場合は、円形部分 ~ と基底部分の両方もが文様配置の空間として完全に抽象化されて組み合わせられ

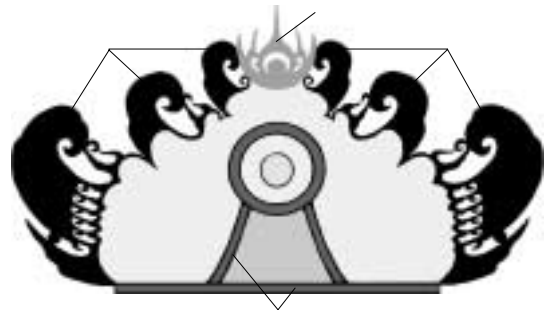


図4 四天王像宝冠空間分割構成図

ている。さらにこの两部分の周囲を連珠文帯によって輪郭づけることで、両者は完全に融合した形となっている。脇侍宝冠とは異なり、四天王宝冠ではすでにこの两部分を別々の構成単位と考えることはできない。この ~ の構成部分の輪郭は前方後円墳の形を想起させるが、いまは仮に形式語として鍵穴形という呼称を用いておく。

このように四天王宝冠の空間構成を見てみると、この宝冠はわずかに鍵穴形 ~ , 変形日月形 , 翼形 の3部分を組み合わせただけにすぎないということになる。しかしこれらの空間分割がどのような基準から定められたかとなると、脇侍宝冠のように簡単には推測できない。問題となるのは、鍵穴形の円形部の中心点をどのように決めるかであり、基幹部と翼形部

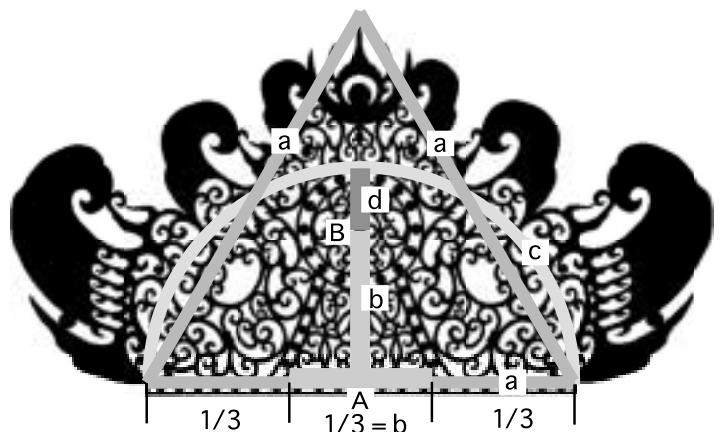


図5 四天王像宝冠空間構成法

分の境となる位置をいかに定めるかであるが、この問題に対する試案を示したのが図5である。第一の基準値となるのはやはり宝冠の底辺の長さであろうから、これを(a)とすると、その1/3の長さ(b)は鍵穴形 ~ の底辺の長さに一致する。円形部分の中心点Bは、底辺の中央Aより(b)を立ち上げると定めることができる。また底辺の中央Aより底辺の半分の半径とした円(c)を描くと、円形部の頂点が定まり、これと円形中心点Bとの距離(d)を半径として円形部分を作ることができる。また宝冠底辺の長さ(a)による正三角形をつくると、その頂点が日月形 ~ の先端に一致し、これによって宝冠正面の高さを定めることができる。しかし翼形 ~ と基幹部 ~ の境界をどのような基準から割り出したかに関しては、宝冠底辺(a)を直径とする半円(c)が一応の目安になりそうではあるが明らかでない。

ところで四天王宝冠の空間構成法であるが、その根本はやはり多分に各部分の加算的構成原理に基づいている。翼形部分 ~ と変形日月部分 ~ は明確な輪郭をもって存在し、宝冠基幹部 ~ に埋められた鍵穴形部分 ~ もなお幅広い連珠文帯 ~ によって厳格に区分されている。この点は救世宝冠の鍵穴形 ~ が基幹部 ~ の文様に埋まってその区分感を喪失しつつあるのに比較すればより明らかであろう。四天王宝冠を造形化するにあたっては、先に述べたように巨大な翼を形作らねばならないという認識に加えて、翼形 ~ ・日月形 ~ ・鍵穴形 ~ の三部分を不可欠なものとして、明確な輪郭をもって組み合わせねばならないという意識が存在したのである。しかしながら、こうした加算原理には、すでに全体を有機的に統一しようとする第二の造形意識がうかがわれることにも注意せねばならない。それは基幹部 ~ の輪郭の喪失にあらわれる。これは翼を配した後、それに対応させつつ内側を文様で埋め合わせていったもので、部分の単純な足し合わせでは造形不可能なものであり、全体を有機的に融合させようとする造形力を必要とするものである。

3. 救世観音像宝冠(図6)

この宝冠の輪郭は脇侍宝冠同様に三山冠形式といってよいであろうが、技法の相違を前提としても、両者の造形性は全く異質である。構成区分は極めて単純で、全体の中央に鍵穴形 ~ を、輪郭頂部に変形日月形 ~ を配するのみである。変形日月形 ~ の面積比率は全体のわずかに2%にしかすぎず、特にその存在を強調するものではない。鍵穴形 ~ の面積比率は、四天王宝冠が全体の28%を占めるのに対して19%を占め、数値的にはさほど小さなものでもない⁹⁾。しかし鍵穴形内部 ~ とそれを囲む基幹部 ~ の文様が細かく複雑なうえに、輪郭となる連珠文帯 ~ の幅が狭いため、全体の中で鍵穴形部分が独立しているというような区分感を感じさせない。この宝冠では変形日月形も鍵穴形も全体の文様の中に埋没してしまっている。つまり救世の宝冠では、部分構成の単純化のなかで全体が一つの文様配置の場となり、空間構成ではなく文様自体が多様に細かく複雑化しているのであり、その造形化の関心は宝冠全体の構成よりも文様自体の構成に移っているのだといえよう。

このような救世宝冠の造形特色は、脇侍宝冠が各部分の加算的構成法によって形作られ、四天王宝冠も基本的にそれを踏襲していたのに対して、まず全体を把握してその中に各部を有機的に作っていくという、いわば乗法的な構成方法に基づくもので、脇侍宝冠などとは全く異質の造形原理に従っているのである。こうした造

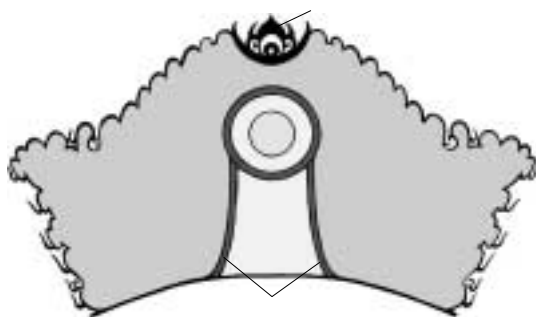


図6 四天王像宝冠空間分割構成図

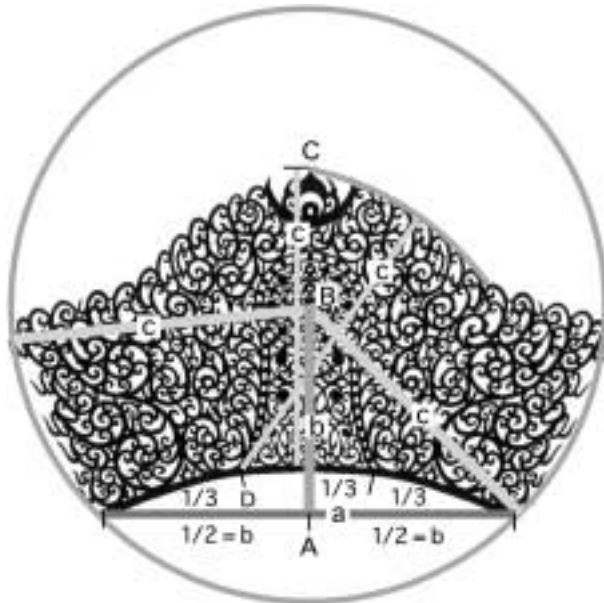


図7 救世観音像宝冠空間構成法

形原理は文様構成にも現われており、脇侍や四天王宝冠の文様が、空間構成と同様に限られた文様単位の加算であるのに対して、救世宝冠はまず基本的な構成をしたうえで、そこに種々の付随的な文様単位をはめこんでいく充填的方法をとっているのである。

ところでこの救世宝冠の空間分割方法については、四天王宝冠の場合よりも推測が容易ではないかと思う。図7はその試案である。第一の基準値はやはり宝冠底辺の長さ(a)であろうが、これを二分した長さ(b)を底辺の中央点Aよりたちあげると円形部の中心点Bが定まる。この中心点Bより底辺の端までの長さ(c)を半径とした円を描くと宝冠左右の先端部分が定まる。鍵穴形の底辺中央より(c)の長さを立ち上げると日月形の上端が定まり、それがこの宝冠の正面の高さとなる。また宝冠左右上辺の輪郭曲線を決めるには、鍵穴形底辺の左右端Dから(c)の長さを半径とした弧を描けばよい。鍵穴形の底辺の長さは、宝冠底部の曲線をほぼ3分割した長さに当たる。このように宝冠の輪郭と基本部分の配置方法は(c)という基準値を見いだせば容易に推測できる。これは四天王宝冠

の空間分割が各部分の相対的な加算法によってなるため、全体に当てはまる基準値が見いだしにくいのは対照的である。救世宝冠ではあくまで全体的な設計意識が先行しているものであり、こうした造形意識が、上述した全体を把握してその中に各部を有機的に作っていくという構成方法を生みだしているといえよう。

以上、文様配置の場(装飾空間)を分析するという視点から、3宝冠の空間分割構成比較を行ってきた。種々の問題があるが、基本的な点は3宝冠がそれぞれ独自の明確な造形原理によって空間構成されているということである。この点は注意すべきことで、こうした空間構成法からのみいえば、3宝冠は明らかに脇侍→四天王→救世と、加算的な構成法から乗法的な構成法へと、その造形原理を展開しているといえるであろう。

3宝冠の鍵穴形について

さて3宝冠それぞれの全体的な空間構成について考えてみたわけであるが、各構成部分についてはどのような問題があるだろうか。まず一見して注意を引くのは3宝冠いずれにもある日月形や四天王宝冠の翼形であるらしく、従来の研究でもこれらの意味や起源を論じたものは散見する¹⁰⁾。

これに対して、これまでほとんど問題とされていないのが鍵穴形の構成部分である。これは宝冠の正面中心という造形の要となるところにありながら、不思議と看過されてきた。その原因はいうまでもなく、従来の研究では文様ばかりに関心が集中し、文様が配される場に対する関心が薄かったためである。しかし上に提示してきた各宝冠の空間分割図を見れば、この部分の持つ重要性は無視しえないであろう。四天王・救世の宝冠には、その正面中心になぜこのような形が配されねばならなかったのだろうか。

図8は3宝冠より鍵穴形部分のみを抽出して示したものである。四天王と救世宝冠の鍵穴形に類似性のあることは容易に気づかれることであるが、脇侍宝冠についてはこの図のように並べてみて初めて視覚的に認識できるのではないだろうか。もっとも注目すべき点は、脇侍→四天王→救世宝冠という順番で、円形部分がしだいに基底部分に沈み込むように組み込まれて一体化していく傾向にあるということである。この傾向は組み込まれていく面積の大小だけに見られるのではない。

まず脇侍と四天王宝冠を比べてみると、四天王では円形部分と基底部分のいずれをも連珠文帯で囲んでしまうことに注意せねばならない。つまり脇侍宝冠では基底部分に円形蓮華文を乗せただけで、両者が別々のものという感じであるのに対して、四天王宝冠では初めから結合した一つの形として考えられているのである。このことは脇侍宝冠の場合、円形部および基底部の4種の文様がすべて異なったもので、各部分の相違が表されているのに対し、四天王宝冠では両者に同様の文様が配され、明確な区別がなされていないことからいえる。

しかし四天王と救世宝冠を比べれば、四天王宝冠の円形部周囲の連珠文帯はこれを基底部と区分するに十分な幅と透かしの空間を保っている。さらに両者の結合部分のすばまり方が大きいことも、ふたつが別々の部分の組み合わせであることを強く感じさせる。これに対して救世宝冠では、基底部の上方は円形部によって大きく押し開かれ、すでに三角形という形状を失い両者完全に一体化している。救世宝冠の場合、これを四天王宝冠と比較して見ることがなければ、特に両者の組み合わせに関して注意を引かれることもないのではないかとと思われるほどに融合している。

さてこのように3宝冠の穴形を比較して見れば、これら三つは明らかに同一線上の造形展開にあるといえよう。脇侍宝冠を原形として、その円形蓮華文と支えの部分が模倣されていく過程で、原初の具体的形と意味が不明となり、それにとまって抽象化され文様化された形として生みだされたものが四天王や救世宝冠の鍵穴形といってよいであろう。そしてこのような造形展開は、先に見た宝冠全体の空間構成法の展開とも全く一致するものである。



図8 3宝冠鍵穴形比較図

鍵穴形に関連する小金銅仏の宝冠

以上の結論はあくまで3宝冠だけを比較して得たものにすぎない。法隆寺という限定された場所に伝来する3宝冠であるから、それらの相互関連性、影響関係は十分に必然性がある。しかしこの推測をより確実なものにするためには、脇侍宝冠の形式が当時の宝冠形式として、特殊なものか一般的なものか、模倣対象とされるような正統性、すなわち源流をもつものかどうかを明らかにせねばならない。

そこでここでは八世紀を下限として鍵穴形の作例を求めてみる。この時期の宝冠作例から鍵穴形を抽出するとすれば、その検索領域はまず小金銅仏群に設定してみるのが適当であろう。制作期が八世紀頃までと考えられている小金銅仏のなかで、宝冠のある作例は121例をかぞえる¹¹⁾。この宝冠作例をその輪郭によって分類してみると、三面頭飾が95例、単一正面頭飾が5例、山形頭飾が21例となる。しかしこのうち鍵穴形との関連を思わせるものは、わずかに表1にあげた16例しかない。さらにこの16例中、明確に鍵穴形を指摘できるものは法隆寺献納金銅仏143号脇侍立像2体、観松院半跏像、法隆寺献納金銅仏155号半跏像の4例にすぎない。

法隆寺献納金銅仏143号は一光三尊形式であ

るが、この両脇侍宝冠は細部に多少の相違はあるものの、全体の構成は同じ形式の山形冠である。図9のように正面に鍵穴形部分、その上に日月形部分を構成し、側面にいたる残りの空間全体には左右二組計4つの半パルメットを配置している¹²⁾。鍵穴形は円形部分が六弁の蓮華文になり、基底部分は左右外辺に連珠文的な支柱を作る。小像であり彫りも荒っぽく、山形冠と三山冠の側面構成の相違はあるが、蓮華文の鍵穴形、日月形、左右半パルメットの構成のみ見れば、これは法隆寺脇侍宝冠の構成にもっとも近い作例である。

観松院半跏像宝冠(図10)は表面が荒れて文様の輪郭がとりにくい、山形冠内部の空間分割構成は143号と同様であろうと思われる。ただ区分構成は同じながら、鍵穴形の円形部は幾何学的に整えられて抽象化した蓮華文となり、これを支える左右の二重連珠文帯との結合も、かなり一体化の進展した形となっている。また円形部中心から基底部に房状のものが垂らされている点も異なる。

献納金銅仏155号半跏像宝冠(図11)は脇侍宝冠と同じ三山冠形式である。鍵穴形は基底部分が連珠文帯で囲まれた三角形として独立し、ずいぶん縮小された円形部の上に重なり、その下方の輪郭を切り取っている。このように基底部分が中心となって、円形部を二次的に扱う鍵穴形は他の作例とは全く逆の造形である。これは円形部が本来蓮華文であったことの意味が忘却され、意味の喪失がそのまま形の退化・消滅へのプロセスを進んでいるものと考えられる。143号脇侍宝冠や観松院像宝冠、さらに釈迦三尊像脇侍宝冠に比べ、三角形内部の文様や左右の植物文も具体性を失い単純化、抽象化が進展している。また円形部の上にあるはずの日月形も、三日月に蕾を配し

表1 鍵穴形関連小金銅仏宝冠作例

鍵穴形関連小金銅仏宝冠作例				鍵穴形	三角形	房形	日月形	植物形	図版A	図版B	図版C
所蔵	尊像名	宝冠形式									
1 法隆寺献納143号	一光三尊右脇侍菩薩立像	山形冠	◎			◎	◎	2	29	17	
2 法隆寺献納143号	一光三尊左脇侍菩薩立像	山形冠	◎			◎	◎	2	29	16	
3 観松院(長野)	菩薩半跏像	山形冠	◎		◎	◎	◎	7	37	5	
4 法隆寺献納155号	菩薩半跏像	三山冠	◎			◎	◎	6	57		
5 神野寺	菩薩半跏像	三角冠	◎	◎	◎	△	△	34	62	6	
6 法隆寺献納165号	辛亥銘観音菩薩立像	三角冠	◎			◎	◎	8	5	26	
7 四天王寺	菩薩半跏像	山形冠	◎	△	◎	◎	◎	83	128	17	
8 岡寺	菩薩半跏像	三面頭飾	◎	◎	◎	◎	◎	102	20	69	
9 法隆寺献納166号	観音菩薩立像	三角冠	△	◎		△	△	32	59	30	
10 船形山神社	菩薩立像	三角冠	△				※	1	42		
11 法隆寺宝蔵殿	止利式菩薩立像	三山冠	△		◎	△	△	3	54	2	
12 法起寺	菩薩立像	山形冠	△	△			△		61	3	
13 法隆寺宝蔵殿	戊子銘釈迦脇侍菩薩立像	三山冠	△			△	△	28	4	1	
14 小谷寺(滋賀)	菩薩半跏像	山形冠	◎	◎	◎	◎			64		
15 松田家(神奈川)	菩薩半跏像	山形冠	△					136	186		
16 個人蔵	菩薩立像	山形冠	△						52		

(備考) 表中◎は確実 △は可能性 ○は模刻の可能性 ※は三連華を示す
 図版A 久野健『古代小金銅仏』 図版B 松原三郎『小金銅仏』
 図版C 佐藤昭夫『法隆寺献納金銅仏』

左脇侍宝冠



右脇侍宝冠



図9 法隆寺献納金銅仏143号宝冠



図10 観松院半跏像宝冠



図11 献納金銅仏155号半跏像宝冠



図12 法隆寺止利式菩薩立像宝冠

たようなものに変化している。

以上明確な鍵穴形作例は4例にすぎないが、これだけでも脇侍宝冠の形式が必ずしも特殊なものでなかったということはいえるであろう。それではこれら宝冠作例の造形展開はどのようなものであったのか。143号像と観松院像においては、鍵穴形円形部分の抽象化という点から判断して、前者が先行するものと考えられる¹³⁾。両像は我が国最初期の渡来仏と考えられているが、これらの宝冠と脇侍宝冠を比べるとどうであるか。一見して前者から後者への展開があるようにも見える。しかし日月形部分の構成割合を注視すれば、前者は鍵穴形円形部の半分を占めるほどの大きさであるのに対し、脇侍宝冠で

は鍵穴形を基準とした日月形の造形比はわずか5%にすぎない。日月形はペルシャ王冠に源流を発するもので¹⁴⁾、本来非常に大きな造形割合を持って強調されるが、伝播の過程でだいに小さくなっていく。脇侍宝冠の場合は、日月形本来がもつ造形割合を踏襲することよりも、すでに全体の構成のまとまりを重視する段階となっているのである。この理由により、143号像と観松院像宝冠は脇侍宝冠に先行するものと考えたい。

155号半跏像宝冠が脇侍宝冠形式の写し崩れであることはすでに多言を要しないであろう。ただここに注意すべきは、155号像宝冠鍵穴形に見られるような形式変化は、脇侍宝冠から四

天王宝冠鍵穴形への形式展開の途中に存在するものではないかということである。この像の場合、先に述べたように円形部分が二次的なものに退化しているのに対して、四天王宝冠鍵穴形においては円形部分があくまで構成の中心を占めている。しかしこのような相違はあっても、鍵穴形全体の抽象化や、円形部と基底部の結合部分のすばまりなどは、明らかに四天王宝冠の構成法と同一のあり方を示している。おそらくこの像のような写し崩れはこの時期には多数存在したことであろう。図12は法隆寺の所謂止利式立像の宝冠である。同像は155号像とは同時

期のものでされているが、この宝冠には鍵穴形を認めることができず、文様もほとんど意味不明なほどに崩れている。ただ、このように宝冠の地全体を文様によって充填しようとする傾向は、あるいは四天王の宝冠基本部分を透彫りによってすべて文様化する発想を導くものであったかもしれない。

さて以上のように鍵穴形の造形展開を、143号像→観松院像→脇侍→155号像→四天王→救世と考えてみたのであるが、これら作例の周辺としては、さらに次の2種の作例群を考えることができる。



法隆寺献納金銅仏165号宝冠

図13



神野寺半跏像宝冠



四天王寺半跏像宝冠



岡寺半跏像宝冠



法隆寺献納金銅仏166号宝冠

その1群は図13に示した5例である。これら宝冠構成の基本は単純で、正面に比較的高い二等辺三角形を区画し、その頂点に日月形を配するものである。これらの両側面には、法隆寺献納165号と神野寺像宝冠のように羽毛形とも長細い葉形とも決めがたいものを配するグループと、四天王寺像や岡寺像宝冠のように先端を巻いた植物文を配するグループがある。像の制作年代からすれば、**・**が**・**に先行するものであることは明確であり、

の展開には法隆寺献納166号のように三角形が崩れて日月形を失ったものも考えられる。また**・****・**の三角形内区には、観松院像宝冠(図10)にみた房状の装飾がある。

問題はこれら宝冠の三角形が鍵穴形といかに関係するかである。三角形の頂点に直接日月形を配した形式が原形としてあったものか、あるいは鍵穴形の円形部分が消失した結果として生じたものか。ところで**・****・**の房状装飾については、これをストウパと解説するものをしばしば見かける。しかし観松院像宝冠を見れば、これは本来、蓮華文の中心から垂らされた房飾りであることは明らかであろう。もしこの点を重視するならば、**・****・**の形式は観松院像宝冠の形式から円形蓮華文部分が消失してしまったものと考えねばならないだろう。155号像宝冠(図11)では鍵穴形の円形部が縮小され、基底部分が三角形として独立化していたが、この傾向も上記の推測を助けるものではあるまいか。

いま一つ鍵穴形に関連して考えておかねばならないのが、船形山神社菩薩立像宝冠(図14)である。これは半円的な三角形を中心としてその周囲に三つの蓮華を平面的に配したものである。この形式は我が国では他に見出すことはできず、図15の三例のように三国時代朝鮮小金銅仏に多少見いだすことができる¹⁵⁾。この宝冠形式の問題は、船形山神社像では中央の蓮華と下の三角形部分が完全に分離しているが、扶余窺岩里新里出土菩薩立像宝冠のようになると中央円形と三角形部分が完全に一体化してしま

図15



扶余窺岩里新里出土菩薩立像宝冠



扶余軍守里麁寺出土菩薩立像宝冠



図14 船形山神社菩薩像宝冠



韓国中央博物館半跏像宝冠

い鍵穴形といってよい形になっていることである。つまりこれら三蓮華冠とでもいう形式が、先にみた143号両脇侍・観松院像・155号像など、我が国の鍵穴形最初期の作例となんらかの関係を持っているのではないかということが考えられる。しかしこの問題はこれまで提示した作例のみでは判断できない。解答を見いだすためには、以上みてきた作例群よりもさらに先行する中国作例を探してみる必要がある。すなわち問題を鍵穴形の源流を求めることに進めなければならない。

(以下次稿)

注

- 1) 文様史研究の方法論に関しては、山本謙治『コンピュータ利用による文様分析法の確立と我が国5～13世紀文様史の時代区分』(平成11～12年度科学研究費補助金研究成果報告書, 2001年)の第1章を参照されたい。
- 2) こうした分析研究をおこなった個別論文は多いが、代表的な労作としては林良一『東洋美術の装飾文様 植物文篇』(同朋舎出版, 1992年)がある。また研究方法の概説としては長広敏雄「装飾意匠と文様」(『世界考古学体系16』平凡社, 1962年)86-87ページを参照されたい。
- 3) 3宝冠の造形分析についてはすでに13年前に「法隆寺にみる三宝冠の構成 金堂四天王および夢殿救世観音透彫り宝冠の鍵穴形モチーフ」(『博物館学年報』20号, 同志社大学博物館学芸員課程, 1988年)を發表し, 1988年11月の美術史学会西支部例会において「法隆寺金堂四天王及び夢殿救世観音の透彫り宝冠について」として口頭発表した。これはコンピュータを利用した文様分析の最初期の試みであったが, 当時のパーソナルコンピュータではハード, ソフト両面において限界があり, 研究発想を十分に具体化できないとともに, コンピュータにより作成した資料も極めて稚拙なものであった。しかしこの10年のコンピュータの進歩はめざましく, ようやくハード, ソフトにとらわれず, 研究者の問題意識に即したコンピュータ利用ができるようになった。また私自身, 文様史の方法論や問題意識も当時とは変わったところがあるので, 本稿では掲載資料をすべて作成し直し, 本文, 注も全面的に書き改めた。ただし3宝冠の造形特色や鍵穴形に関する見解の骨子は前論を踏襲している。
- 4) 法隆寺金堂釈迦三尊像脇侍宝冠の展開図は, 田澤坦・久野健編『法隆寺金堂釈迦三尊像』(法隆寺資料彫刻篇第一輯, 岩波書店, 1949年)第7図東(左)脇侍像宝冠(拓影)および第8図西(右)脇侍像宝冠(拓影)のうち第8図を修正作成した。四天王像・救世観音像宝冠は, 町田甲一『上代彫刻史の研究』(吉川弘文館, 1977年)195ページ掲載図52救世観音像宝冠(拓影)および211ページ掲載図66四天王像宝冠(拓影), 井上正「飛鳥文様の一列について」(『美術史』24号, 美術史学会, 1957年)20ページ掲載第3図法隆寺金堂四天王像宝冠展開復元図・第4図法隆寺夢殿救世観音像宝冠展開復元図, 水野清一『法隆寺』(日本の美術4, 平凡社, 1965年)70ページ掲載挿図50四天王の冠(模造), 蔵田蔵・中野政樹『金工』(ブック・オブ・ブックス 日本の美術39, 小学館, 1974年)97ページ掲載挿図5救世観音宝冠(拓本)を比較修正して作成した。
- 5) 宝冠の定義や形式分類名, 各部の呼称については研究者によりまちまちで, 3宝冠の形式名にしても三山冠・山形冠・筒形冠など様々である。本稿では宝冠研究の基礎論文である千沢慎治「金銅四十八躰仏宝冠考」(『東京国立博物館紀要』4, 東京国立博物館, 1969年, 49-101ページ)において使用された分類と名称に従う。千沢は宝冠を仏像の頭部を荘厳する頭飾を総称した呼称と規定し, 宝冠全体を頭飾部分と冠帯部分のふたつに大別し, 冠帯を環帯・結輪・結び目・垂帯に区分している。また四十八躰仏に見られる頭飾を, 即視的な外形から山形頭飾・三面頭飾・単一正面頭飾の3種に分類し, 山形頭飾をさらに山形冠(宝冠の上辺がアーチ型のもの)・三角冠(宝冠の上辺が三角形のもの)・三山冠(宝冠の上辺が三つのアーチの組み合わせになるもの)の3種に分類している。同書52-56ページ。
- 6) 水野清一『法隆寺』平凡社, 1965年, 22ページ。

- 千沢, 同上書, 59-62ページ。
- 7) 面積比率はすべてDeneba Canvas version 6.0.1を使用して算出した。
- 8) 宝冠の鳥翼型宝飾に関しては, 林良一「サーサン朝王冠宝飾の意義と東伝」(『美術史』28号, 美術史学会, 1958年), 同『シルクロード』(美術出版社, 1962年)および山本謙治「古代美術の頭飾にみる翼モチーフの造形」(『博物館学年報』21号, 同志社大学博物館学芸員課程, 1989年)を参照されたい。
- 9) 四天王像宝冠の場合では, 鍵穴形の実際に感じる大きさの印象は, 基幹部 に対する割合ではなく, 翼を合わせた全体に比較して感じられるものであろうから, ~ の全体面積に対する比率を算出して28%とした。
- 10) 石田幹之助「飛鳥・奈良両朝時代とイラン文化」(『大和文華』2号, 大和文華館出版部, 1951年)および林良一前掲論文, 前掲書。
- 11) 久野健『古代小金銅仏』(小学館, 1982年), 松原 三郎『小金銅仏』(東京美術, 1979年), 佐藤昭夫『法隆寺献納金銅仏』(講談社, 1975年)より収集。紙面の都合で一覧表は省略する。
- 12) 千沢, 前掲書, 第1図・第2図, 7ページ。
- 13) これは両者を同一系統上のものとしての判断である。観松院像の鍵穴形円形部の方が蓮華文の抽象化が進展していることは明らかであるが, これがもし房飾りをもつ別種の鍵穴形装飾の展開であるならば, 両者の前後は決しがたい。
- 14) 林良一, 前掲論文参照。
- 15) 銅造菩薩立像 扶余窺岩里新里出土 国立扶余博物館
金銅菩薩立像 扶余軍守里廢寺出土 国立中央博物館蔵
金銅弥勒半跏像 国立中央博物館蔵
以上, 久野健『古代朝鮮仏と飛鳥仏』(東出版, 1979年)図版18・15・74。

(2001年5月11日受理)